

1 “南丹”とは？（PART 1） ～歴史から南丹を考える～

“南丹”は、京都府と兵庫県にまたがる“丹波”の南部を占める地域です。
南丹の今とこれからを考える前提として、平安京以前からの長いその歴史の中から、南丹の特性を考えました。

1 “丹波”の南部を占める地域

“南丹”は京都府と兵庫県にまたがる“丹波”の南部を占める地域です。

古代の丹波国は、現在の京都府北部をも含む大きな国でしたが、奈良時代に北部を丹後国として分離し、京都府中部と兵庫県東部からなる丹波国が新たにスタートしました。

丹波は、大きく分けると、“口丹波”“中丹波”“西丹波”の3地域になりますが、南丹はこのうち“丹波の入り口”を意味する“口丹波”にあたります。口丹波には、丹波国の国府や国分寺がおかれ、丹波国の政治・文化の中心として丹波国を支えてきました。

また、丹波の名称は、太古の時代、一面に丹（あか）い水をたたえた湖であったことに由来するとも、山国を意味する「谷端」や広く平らな田を意味する「田庭」が転じたものとも言われていますが、この名前の由来が示すとおり、南丹は水、山、田の豊かな地域です。

2 盆地や谷で育まれた独自文化

南丹地域の82.8%は森林であり、丹波高原とそれに連なる丹波山地の中に、亀岡盆地、園部盆地、神吉盆地、須知盆地など、数多くの小盆地や谷がつくられています。

司馬遼太郎氏は『この国のかたち』の中で、「谷こそ古日本人にとってめでたき土地だった。～（中略）～村落も谷にできた。近世の城下町も、谷か、河口の低湿地にできた。」と記していますが、南丹地域でも、盆地や谷に、亀山城、園部城、八木城などの城下町や村落が作られ、山に囲まれたほどよい大きさの地域の中で、独自の生活・経済圏を形成してきました。

また、各地域では、人形浄瑠璃などの伝統芸能や多種多様な祭、“丹波ブランド”に代表される食文化など、多彩な文化が各地域で大切に育まれてきました。

3 川や街道のネットワークによる交流・連携

各集落は、薪炭・堆肥などの生活の糧を周囲の里山から得るなど、山林と大きく関わりながら発展してきました。また、山々から集まった水は川となり、盆地や谷の中央を貫流していますが、これらの川もまた、人々の暮らしには大変関わりの深いものでした。

南丹地域では、丹波高原を分水嶺として、南東部には桂川が流れ、やがて淀川と合流して大阪湾に流れ込み、北西部には由良川が流れて日本海に注いでいますが、これらの川は、人や物資を運ぶ重要な交通手段であり、また、豊かな自然や食、美しい景観を与えてくれるものでもありました。一方で、川の歴史は、洪水との戦いの歴史でもありました。

川の交通とともに重要な交通手段であったのが、陸のネットワークである街道です。山陰道、篠山街道などの街道には多くの人や物資・文化が行き交い、街道沿いは亀山（亀岡）や園部等の城下町や宿場町として賑わいました。

4 都や日本の歴史を支え、動かしてきた地域

南丹地域は、都に近い地の利を活かして、都と大きく関わりながら発展してきました。材木・米・薪・炭などの重要物資が桂川や山陰道などの陸路を通して都へと運ばれました。長岡京や平安京の造営の際に使われたのも南丹地域の材木であったと伝えられ、園部や亀山（亀岡）はこれらの集散地として栄えてきました。

また、足利尊氏が鎌倉幕府倒幕を目指して挙兵し、明智光秀が築城した地もあるなど、都に近い要衝として歴代権力者が重視してきた地域でもあります。さらに、画家の円山応挙や石門心学の石田梅岩、陶芸家の野々村仁清など、多くの歴史上の偉人も輩出してきました。

このように、南丹地域は、さまざまな人的・物的資源によって、都や日本の歴史を支え、時には歴史を動かしてきた地域です。一方で、都との間に山や峠などの自然の障壁が存在することにより、都の影響を受けながらも、独自の地域文化圏を形成、保持してきました。